

4.

7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK

官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」

2005.3.15.



「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」

「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

天武天皇と天武天皇の浄御原宮を読んだ歌である。

7世紀後半 壬申の乱（672）の後 天武天皇は明日香の浄御原宮で即位する。

それまでは三輪山麓の南 磐余の地に宮が置かれていましたが、古代天皇の代替りごとに宮を移す「歴代遷宮」の慣行がつづいていました。この7世紀後半になると、皇極=飛鳥板蓋宮 孝徳=難波長柄豊碕宮 斉明=後飛鳥岡本宮天智=近江大津宮 天武=飛鳥浄御原宮と主に飛鳥の地に宮が営まれ（飛鳥京）、次の持統天皇の時代に藤原宮が永遠の都として造営される。（694）

（この大化の改新から平城京遷都までの中央集権・律令政治

確立の時代を飛鳥時代の中でも白鳳時代と呼ぶ。）

5世紀に青垣・三輪の山裾に地方・大和の豪族の連合体として誕生した倭王権が次第に支配力を高め、中央集権化を強めて、古代国家から律令国家への歩みをスタートする。（6世紀末 三輪王権 推古天皇・聖徳太子の飛鳥時代の始まり。）

そして、7世紀後半 大化の改新・壬申の乱を経て、連合体から中央集権の律令政治の国としての体裁を確立し、「ヤマト」に「倭」の字をあて、「天皇」の言葉がはじめて使われるそんな時代が天武天皇の時代 いわゆる白鳳 律令国家の誕生である。

この飛鳥時代 国際的には朝鮮半島と倭とが密接な関係を持ち、朝鮮半島から数々の渡来人がやってきて

文化。技術を日本に伝えた時代でもある。

鉄についても5世紀後半から6世紀前半 韓鍛冶の渡来によって 製鉄技術が伽耶・百濟・新羅・慕韓



など朝鮮半島諸国から移転され、大和では 大県（柏原市）・布留（天理市）・脇田&南郷（葛城市）などで、専門の鍛冶工房が営まれると共に鉄の自給に向けた製鉄が模索・開始される。そして 6 世紀中葉～7 世紀日本各地で製鉄が本格化し、7 世紀になると砂鉄によるたたら製鉄もはじまり、数々の鍛冶・金属加工技術も発展すると共に鑄物のる技術も移転され。



甘樫丘より倭平野 左奥 金剛山・葛城山 中央 大和三山 右奥 畝傍山・天香具山

鉄の視点で倭王権を見ると朝鮮半島の鉄技術移入の覇権を握った倭王権がその力を背景に日本各地の支配力を高め、中央集権の日本統一を完成した時代である。

そして 万葉集の歌

「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」

「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

が生まれる。

この古代の中心地 飛鳥で 最近 数々の古代遺跡が発掘され、飛鳥時代の時代感がクリヤーになってきた。

明日香村大字岡にある「明日香板蓋宮伝承地」

では 4 つの宮殿遺構が重複して確認された。



舒明=飛鳥岡本宮（630）皇極=飛鳥板蓋宮（655）

斉明=後飛鳥岡本宮（656）天武=飛鳥浄御原宮（672）

甘樫丘と多武の峯にはさまれた狭い飛鳥の地に 7 世紀後半に 4 つの宮が営まれ、古代中央集権の大和王権が確立する。飛鳥はこの時代まさに飛鳥京と呼ぶにふさわしい王城の地であった。

朝鮮半島からの鉄素材供給を中心とした文化・物・人の覇権を一手に支配し、朝鮮半島からの数多くの渡来人技術集団・文化・物を受け入れつつ、勢力を高め、壬申の乱を経て 律令国家として「国家」と呼ぶにふさわしい日本統一を成し遂げたのが、7 世紀後半天武天皇の時代である。



その力の源泉 「鉄」について言うと、鉄伝来以来 悲願であった鉄生産の自給も軌道に乗り、日本各地で

たたら製鉄による大規模生産もはじまる時代である。

一度 和鉄を飛鳥に探して ゆっくり歩いてみたいと思っていた時に、大和王権を支えた一大鍛冶工房が飛鳥の中核部に存在するのを知りました。飛鳥池生産工房遺跡である。一時話題となった最古の貨幣「富本銭」が此处で作られたという。

また、飛鳥京のすぐ南東側 川原寺跡史跡からは同じ7世紀 寺の創建・営繕にかかわる金属・瓦の川原寺寺院工房（7世紀から平安時代）が出土し、川原寺寺域北限施設 川原寺寺院工房遺跡として保存されていることも知りました。

2月になって、少し暖かくなったので、これら古代 飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて飛鳥を歩いてきました。

また、3月 「飛鳥浄御原宮の正殿が発掘された」と新聞が伝えたのを読んで、再度飛鳥の地へ。

久しぶりの飛鳥 ゆったりと昔を思い出しながらの飛鳥 walk。

天武天皇の時代に大きく飛躍した和鉄の時代 その足跡を訪ねました。



7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk

官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」

1. 「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」概要

1.1. 古代 飛鳥 の 官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」

1.2. 古代 飛鳥 の「川原寺寺院工房遺跡」

2. 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk

2.1. 飛鳥 Walk I 甘樫丘 川原寺寺院生産工房遺跡から石舞台へ

2.2. 飛鳥 Walk II 水落遺跡・伝飛鳥板蓋宮から酒船石遺跡

2.3. 飛鳥 Walk III 7世紀後半 倭王権の大コンビナート飛鳥池生産工房遺跡

3. 飛鳥浄御原宮 「正殿」遺跡 発掘現場を訪ねて 2005.3.9.

4. 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk まとめ

7 世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK
官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」

1. 「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」概要

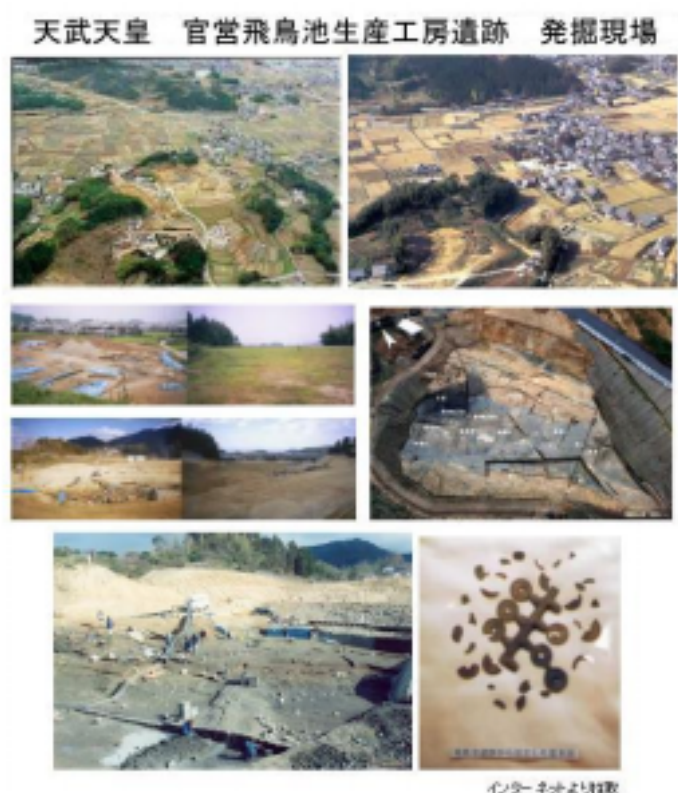
1.1. 飛鳥池生産工房遺跡



今から 1300 年ほど前のこの時代に 飛鳥寺の東南 多武峯山麓の丘陵地 飛鳥寺と亀形石造物が出土した酒船石遺跡に挟まれた谷地に、官営の巨大なコンビナート・官営大総合生産工房が広がっていた。現在その地には巨大な博物館「万葉ミュージアム」が建っていて、建物に取り込むようにこの大生産工房遺跡の一部が保存されていて、出土品の一部が「万葉ミュージアム」で常設展示されている。古代飛鳥の官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」である。

この飛鳥池遺跡は飛鳥の中枢部に営まれた天武・持統天皇の時代 7 世紀後半から 8 世紀初頭にかけての大コンビナート・総合生産工房で、鉄・銅製品の鑄造・鍛冶工房 銀・ガラス・めのうなどの宝飾品工房そして漆工房などの一大総合生産工房で宮殿の造営をはじめ、都の生活を物質面から支えた官営工房で、飛鳥浄御原宮や飛鳥の寺院に供給されたとみられている。蘇我氏が造営した飛鳥寺の東南に接した谷間に立地し、飛鳥浄御原もすぐ近い。工房群は Y 字型に伸びる谷の兩岸に計画的に配置され、金・銀・銅・鉄・漆・めのう・水晶・琥珀・鼈甲などを素材に宝飾品・武具・農工具・建築金物や屋瓦などが生産されていた。

1991 年 飛鳥池の埋立てに先だつ池底の発掘調査で、7 世紀後半の大規模な生産工房の跡が見つかり、人形や釘・針・ピンセットなどの銅製品、仏像や海獣葡萄鏡の鑄型、釘や鋸・ノミ・針などの鉄製品、金属製品を注文する際の木製の見本（雛形）、木工具、漆工具、ガラスの罎埴（るつぼ）や鑄型など多種多様な遺物と共に炉跡や轆の羽口などの鑄造・鍛冶関係の遺構・遺物が大量に出土し、この場所で広範囲にわたる生産活動がおこなわれていたことがわかった。



遺物の大半は、谷筋に厚く堆積した炭の層の中から出土し、生産時に炉で使用した大量の炭を廃棄した際に、いっしょに捨てた様子がうかがえる。

その後、万葉ミュージアムがここに建設されることとなり、1997 年 1 月から本格的な発掘調査が継続的に実施され、この飛鳥中枢部で営まれた古代の大コンビナートの全貌が明らかになった。

鑄造・鍛冶遺構が集中するのは、西側の浅い谷筋の部分で、北に下る斜面を何段にもわたって削り出し、整地をおこなって、ほぼ平坦に近い作業面を造成し、そこにたくさんの炉がつくられている。

炉跡は、上部が削られて、底面近くをわずかに残す例がほとんどですが、基本的に地面を浅く掘りくぼめた形態。同じ場所で、何度も作り替えをおこなったものもある。

炉底や炉壁は高温の火熱を受けて、青灰色に固く焼けしまっている。また、炉の付近には、生産のさいに生じたカス（鉋滓）や焼土の存在も認められた。

また、「琥珀・瑪瑙・水晶などの玉類や、緑・青・黄・赤などの華麗な彩りのガラス玉の宝飾製品と共に小玉鑄型やガラスを融かした埴塙・原料となる石英や鉛」とガラス玉の製作に関わる遺物一式が出そろって見つけられ、従来、ほとんど明らかでなかった 7 世紀の宝飾品生産の実態を解明する重要な資料である。

銀を融かした埴塙の存在も確認され、この場所で、銀製品の生産そのものがおこなわれていたことが確定され、銀の製作加工を示す遺跡としては、国内最古の例である。

何よりも飛鳥池遺跡を有名にしたのは、富本銭の発見。

工場の廃棄物処理場ともいえる炭層から、破片を含めて 560 点以上が出土し、7 世紀後半に鑄造された「最古の貨幣」だったことが明らかになった。

「日本書紀」には、天武 12 年 4 月、「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」と詔（みことり）が出されたことを伝える。

また、「天皇」と記された木簡も出土。天皇の呼び名が確認できる最古の木簡である。

7 世紀後半 律令制度が整った天武・持統天皇の時代に神格化された君主が存在。

「壬申の乱」（672 年）に勝利した天武天皇（在位 672－686 年）が強大な力を手にいれ、唐の都を模した永遠の都 藤原京の造営に着手することなどと合わせ、天武天皇の時代 国力を充実しようとしていた様子を物語る重要な遺跡である。

1.2. 川原寺 寺院工房遺跡



斉明天皇（594-661）が営んだ川原宮の地に天智天皇（626-671）が母の冥福を祈って建立した川原寺。

飛鳥時代 官寺の扱いを受け、広大な寺域に伽藍が立ち並び、飛鳥四大寺として栄えました。

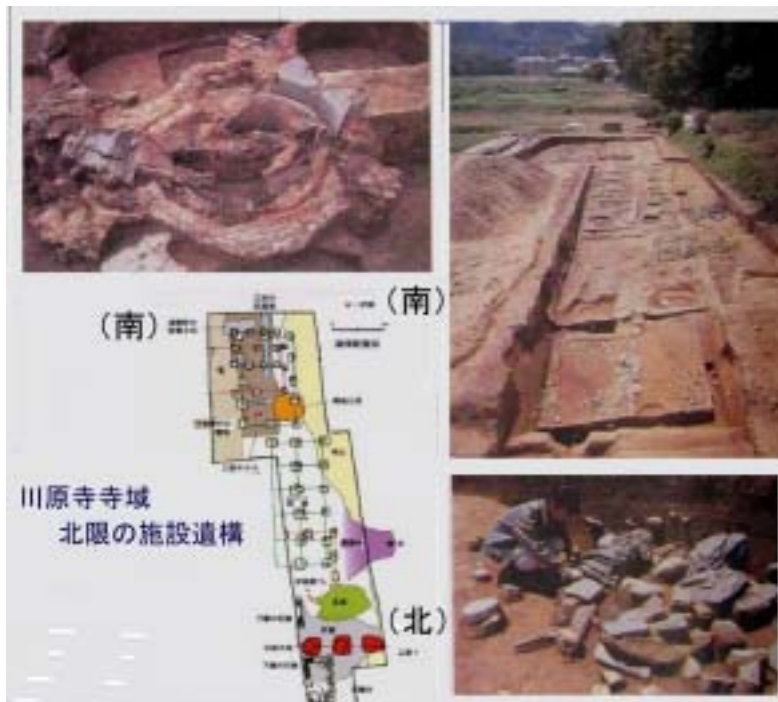
2003 年 この伽藍地北方 300m 程の場所 寺域の北限近くの発掘調査で川原寺創建期から平安時代に続く創建ならびに営繕にかかわる寺院工房の遺構が発見されました。

その主要な遺構は北から南へ北面大垣・瓦窯・掘立柱建物群（双倉）・鑄造遺構・寺院工房などである。

この創建期の関連工房跡および廃棄物層から多量の鉄滓・坩堝・鞆の羽口・砥石などが出土。ほかにガラス小玉鑄型・ガラス片・金属製品鑄型・銅製品・鉄製品・銀片・漆塊などが出土し、川原寺に供給する多彩な製品を作っていたことがわかる。

鑄造遺構では径 2.8m の土坑の中央に鑄型を据えて山側に溶解炉を置いて鉄窯を鑄造。寺で使う湯釜や料理用の釜などとして使われた。

また、一番南の寺院工房跡地には金属やガラス加工のための炉跡群が分布。炉跡群の周りに「コ」字状に排水溝をめぐらし、工房区画が並んでいる。この遺構の各所から銀・銅・鉄・ガラス。などの製品破片や道具（鑄型・羽口・坩堝・漆つぼなど）が多数出土し、この工房で造営や宮繕に必要な資材・仏具などが生産されたと考えられている。



7 世紀後半飛鳥の中樞部に大和王権の鉄鍛冶生産工房を含む大生産工房があった。残念ながらいずれの生産工房からも製鉄炉など製鉄を行った痕跡は認められていないが、多くの鉄滓や鞆羽口とともに多数鍛冶炉がみつき、鑄造も行われていたことが確認されている。

この時代 九州・山陰・瀬戸内・吉備・播磨・近江などでたたら炉による大量安定和鉄生産が始まり、倭王権に持ち込まれただろう。また、畿内でも鍛冶加工とともに大県をはじめ、布留・忍海などの畿内倭王権と関係した専用鍛冶工房でも鉄生産が始まったに違いない。



これらの鉄素材の供給を受けて需要が急増する鉄器の大量生産が官営の専用鍛冶工房で作られたと考える。おそらく この大和近傍で精錬された鉄素材がこの飛鳥の鍛冶工房に持ち込まれ、鉄製品に鍛冶加工された。鉄・銅の鍛冶加工・鑄造技術をはじめ、玉・ガラスの加工技術など重要技術が倭王権が直轄して支配力を高め、他の倭・地方豪族を圧していったことがよくわかる。

7 世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK
官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」

2. 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK

- 2.1. 飛鳥 WALK I 甘樫丘 川原寺寺院生産工房遺跡から石舞台へ
- 2.2. 飛鳥 WALK II 水落遺跡・伝飛鳥板蓋宮から酒船石遺跡
- 2.3. 飛鳥 WALK III 7 世紀後半 倭王権の大コンビナート飛鳥池生産工房遺跡



2.1. 飛鳥 WALK I 甘樫丘 川原寺寺院生産工房遺跡から石舞台へ

2.4. 朝 天候は快晴。 阿部野橋から橿原神宮行近鉄特急に乗って 30 分ほどで橿原神宮である。久しぶりの飛鳥である。

まず、甘樫丘に登って 大和平野を眺めて 後は川原寺寺院工房遺跡と飛鳥池生産工房遺跡を見に行く。昨年 河内の大県鍛冶工房遺跡をみましたが、それに続く古代飛鳥の時代 倭王権中枢の地に存在した官営の鍛冶工房遺跡である。

鉄の自給が始まった飛鳥時代 鉄素材・鍛冶加工そしてその流通をも支配して王権支配の源泉となっていたという。どんな工房が機能していたのか、また 鉄自給の技術を提供したと考えられる渡来の技術集団や倭王権の中枢を担った大和の豪族の動きが見えるかもしれない。

駅で地図をもらって胸わくわくで、健康 WALK を兼ねて橿原駅から甘樫丘を目指して歩き出した。橿原神宮駅から孝元天皇陵の横から南へ新興住宅が立ち並ぶ丘を越えると 30 分ほどで岡寺駅からまっすぐ東へ甘樫丘の南端を通過しての明日香村の中心部・石舞台古墳を結ぶ幹線道路に突き当たり、ここを東に折れると明日香村の観光スポットの案内標識がいくつも掲げられた川原の集落にでる。正面の多武峰の山並みに向かって扇状に田園地がひろがり、左側には甘樫丘そして右の丘陵地の端にそって、この道が山に向かってまっすぐ伸びている。いよいよ 明日香村。丘陵地に囲まれたこの狭い田園地の中にすっぽり古代飛鳥の中心



明日香 川原 2005.2.4.

部が納まっている。

南から高松塚の方から丘陵地を降りてくる道が合流し、北へは甘樫丘の裾を縫う道が分かれる。



甘樫丘が道に沿って北へ続く 2005.2.4.

田園地の向こう多武峰の山並みの手前には見覚えのある川原寺・石舞台へと続く道。道が広く舗装され周辺は大きく変化しているが昔のイメージにある飛鳥が眼前に広がっている。

平日の昼前 静かなものである。

何はともあれ、甘樫丘に登って、大和の国そして飛鳥をみよう。

川原寺の方へ行かず、北へ甘樫丘の方へ曲がるとすぐに甘樫丘へ登る遊歩道の入り口があり、丘陵地の林の中に入ってゆく。

甘樫丘の上には南から北へ起伏のある尾根筋に林の中を縫って遊歩道がつづき、数箇所の展望台があり、この丘の西側には金剛・葛城山をバックに広大な大和平

野が広がっている。また、東側には多武峰の山並みとの間に幅の狭い平坦地明日香の郷が広がる。古代の飛鳥京である。



甘樫丘の上で (左 丘の東側 明日香 中央 丘の上の遊歩道 右 丘の西側 大和平野)

2.1.1. 甘樫丘からの大和平野 & 飛鳥京の展望

【 甘樫丘から 大和平野 眺 望 2005.2.4.】





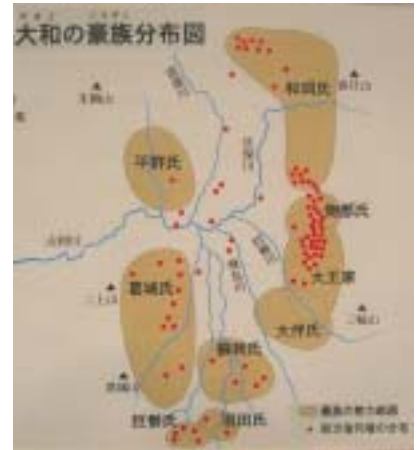
甘樫丘より倭平野 左奥 金剛山・葛城山 中央 大和三山 畝傍山・天香具山

甘樫丘からみる広大な大和平野 平野の中にポツポツと大和三山が点在し、素晴らしい景観を作っている。

また、背後の金剛・葛城の山並みが大きく、本当に堂々としている。これら、大和平野の周りの山裾に沿って、古代大和の豪族たちや渡来技術集団の人たちが本拠を構え、大和王権を支えた。すぐ眼下は蘇我氏の本拠地曾我。そして、この甘樫丘の反対側 多武峰から三輪・青垣の山並みの山裾には大和王族の本拠地が点々と続く。さらにその北は物部氏の本拠地布留である。

本当にこの広い大和平野がホームグラウンドに見えてくる。古代 数々の豪族・王族がこのグラウンドに登場し、消えていった。鉄の集団もこのグラウンドに登場したに違いない。

昼飯をほうばりながらそんなことに思いを巡らす。



【 甘樫丘から 飛 鳥 眺 望 2005.2.4.】



甘樫丘より倭平野 背後の山は多武峰 2005.2.4.



飛鳥寺

多武峰

飛鳥池遺跡・酒船石遺跡

石舞台

伝飛鳥浄御原宮跡

西の大和平野から、丘の反対側東側の飛鳥に目をやると実に静かなのどかな田園風景が広がっている。奥には多武峰がそびえ、狭い平地が飛鳥京。中央 右には天武天皇の浄御原宮など4代の宮が置かれた伝板
ブキ宮跡 左中央に飛鳥寺が見える。地図をだして、古代史跡の位置を照合する。

飛鳥池が見当たらない。確か昔々古い飛鳥寺のすぐ裏に池があったが・・・

ぼこぼこお椀型の森が続くあたりが酒船石古墳のあたりか・・・

その向こうの山裾が石舞台。

甘樫丘で川原寺やその南向こうの高松塚古墳周辺は見えない。

(後でわかったのであるが、飛鳥池は10数年前に埋め立てられ、その時の
底さらえでそこが、古代飛鳥の大生産工房跡であることが判ったと。)

手の届く狭い範囲に古代飛鳥の歴史が詰め込まれているのを実感
する。30分程 丘の上を歩いて丘を下り、川原の集落に戻り、
正面の多武峰の山に向かって少し歩くと見覚えのある風景。
道の左に広い川原寺跡遺跡 右の丘に橘寺が見えてくる。



多武峰に向かってまっすぐ Walk



川原寺跡と現弘福寺



橘 寺

2.1.2. 川原寺遺跡 & 川原寺寺院工房遺跡



川原寺とそのすぐ東側を寺域に沿って流れる飛鳥川



2005.2.4.

川原寺は天智天皇の時代に母斉明天皇の川原宮跡に冥福を祈って建てられた寺といわれ、飛鳥四大寺のひとつとして官立に近い扱いを受けた大寺であつた。

発掘調査により、現弘福寺の位置に中金堂があり、その前庭に 東に塔 西に西金堂が立ち並び、中門から出た回廊がそれらを取り囲む。そして中金堂の後ろには講堂があり、それらを取り囲むように僧房が3面にあったという。

広大な寺域に大伽藍が並んでいた。また、この川原寺遺構の下層に川原宮の遺構があるが、今は史跡公園内に当時の礎石と建物基壇が復元されている。

寺域に沿って南北に飛鳥川が流れ、川の反対側である東の広い田園地に飛鳥の宮跡（伝板蓋宮や浄御原宮など4代の宮）があり、その奥には多武峰がどっしりと構えている。

寺院工房遺跡がある弘福寺の北にある丘の方へ回りこむ。山肌に沿って弘福寺の北へおよそ 500m ほど行ったところに「川原寺の寺域北限施設」として、寺院生産工房跡などが公園として整備されていた。



川原寺生産工房遺跡 2005.2.4. & 3.9.

7世紀後半に此処に墨釜や鑄造炉と鑄造場そして鍛冶炉が並ぶ鍛冶場そして倉庫などが建ち並んでいた。今は発掘後埋め戻され、傍らにここが川原寺の生産工房であったことを解説する案内板があり、建物の柱の位置にコンクリートの丸棒が立ち並ぶ公園として整備されている。

鑄造遺構では径 2.8m の土坑の中央に鑄型を据えて山側に溶解炉を置いて鉄窯を鑄造。寺で使う湯釜や料理用の釜などとして使われた。

また、一番南の寺院工房跡地には金属やガラス加工のための炉跡群が分布。炉跡群の周りに「コ」字状に排水溝をめぐらし、工房区画が並んでいる。

この遺構の各所から銀・銅・鉄・ガラスなどの製品破片や道具（鑄型・羽口・埴塙・漆つぼなど）が多数出土し、この工房で造営や営繕に必要な資材・仏具など多彩な製品が生産され川原寺に供給していたと考えられている。

此処は飛鳥歴史のガイドブックにも乗っていないのか、誰もやってこないが、遺跡のすぐ横を飛鳥川が流れ、川向こうには飛鳥の素晴らしい田園風景が広がっている。



「田園の風景画の中にがポツポツ小さな人の歩く姿 車とコンクリート造りの建物の全くない世界」飛鳥の良さかもしれない。



川原寺生産工房遺跡周辺の景色 2005.2.4.

寺では「学問道場」としての役割がよく論じられるが、この川原寺院生産工房遺跡が示すごとく、古代には数々の新しい技術の生産活動が行われ、先端技術の一大センターであったことが判る。

日本での和鉄生産が始まり、その鉄素材を用いたさまざまな鉄製品への展開 従来の鍛錬鍛冶技術ばかりでなく、鑄造技術 そしてガラスの製造・加工も専用工房として始まった。

おそらく、これらの技術には大和にいる多くの渡来人技術集団も関係しただろう。また 同時期に同じ飛鳥の地で王権の大生産工房として活動した飛鳥池生産工房とも密接に関係していただろう。

これらの先端技術がつつきとこの飛鳥から地方へ伝播していったに違いない。

和鉄もこの時代を経てその生産と需要が大きく拡大し、日本全国でその生産活動が展開されてゆく。

2.1.3. 石舞台古墳へ

川原寺生産工房遺跡から飛鳥川沿いに南へ再度川原寺のところに戻り、川沿いに石舞台へ谷筋を登ってゆく。
川の反対側には広い道路が石舞台へ。こちらは丘にへばりついて川沿いにつけられた遊歩道。

飛鳥川も谷間に入って きらきらと輝きながらのセセラギである。



飛鳥川 玉藻橋

20 分ほどで石舞台古墳の下につく。

石舞台が嚴重な垣に囲まれ、周りがよく整備された公園になっているのにはビックリ。

このあたりは川原寺など飛鳥の平坦部からは一段高くなっていて、以前は飛鳥の中心部が見下ろせ、周辺には美しいレンゲ畑の田園が広がり、その中心に石舞台があって、気持ちのいい場所でしたが。。。。

もっとも道が狭く自動車が溢れかえっていました。



石舞台古墳 2005.2.4.

逆に このあたりは、飛鳥の中心部からは、見上げる高台で石舞台は蘇我馬子の古墳ともいわれており、古墳のすぐ下の広場のあたりには蘇我氏や大王家の邸宅があったところ。

檻の外からゆっくりと石舞台古墳をまわって、引き返して 甘樫丘の下に広がる飛鳥京の中心地 飛鳥板蓋宮から飛鳥寺・飛鳥池周辺へ戻った。

空前の古代 飛鳥ブームを考えるとしかたないのですが。。。。

周辺が整備されて、もうありきたりの観光スポットになってしまっているのにはがっかりでした。

2.2. 飛鳥 Walk II 水落遺跡・伝飛鳥板蓋宮から酒船石遺跡



飛鳥池生産工房遺跡



飛鳥寺



水落遺跡



酒船石遺跡



伝板蓋宮跡



飛鳥池に建つ万葉ミュージアム

石舞台の所からまっすぐ北へ 多武峰の山裾に沿って広がる集落に入る。車がすれちがえるかどうかの細い道の両側に古い家並みが岡寺の門前を経て飛鳥池の方へつづく。昔からの岡寺詣の参詣道で岡寺詣の宿場街・門前街として栄えた古い街道筋 昔のたたずまいを今も残している。



岡寺参詣道の古い家並み



15分ほど家並みの中歩くと川原からまっすぐ登ってきた岡寺への参詣道と交差する。石の鳥居がある正面の参詣道である。「伝板蓋宮」の案内にしたがって、家並みの間を曲がりながら少し下ると家並みのはずれ 広い飛鳥の田園地南側の端に「伝板蓋宮」の標識とともに平地に整備された史跡があった。田園・飛鳥川の向こう正面に甘樫丘が南北に伸び、南西側遠くに午前中に行った川原寺・川原寺院生産工房遺跡のある森がみえる。北には飛鳥寺へと田園地が続いている。

皇極=飛鳥板蓋宮 孝徳=難波長柄豊碕宮 斉明=後飛鳥岡本宮 天智=近江大津宮 天武=飛鳥浄御原宮と続

く7世紀の飛鳥時代にあつて、飛鳥3代の宮が営まれた飛鳥王城の地である。

大化の改新がここであり、壬申の乱を征した天武天皇の飛鳥浄御原宮もこの地で営まれた

この「伝飛鳥板蓋宮」跡を振り出しに古代飛鳥京の時代の水落遺跡・飛鳥寺・酒船石遺跡そして官宮の大コンピナート・飛鳥池生産工房遺跡と地図を片手にあっちへいたりこっちへ行ったりの気ままな walk。



飛鳥 3代の宮が営まれた「伝飛鳥板蓋宮」

2.3.1. 飛鳥王城の地「伝飛鳥板蓋宮」

皇極天皇「後飛鳥岡本宮」→ 齊明天皇「飛鳥板蓋宮」→ 天武天皇「飛鳥浄御原宮」



飛鳥 3代の宮が営まれた王城の地 大化の改新の舞台 「伝飛鳥板蓋宮」
また壬申の乱の後 即位した天武天皇の宮で真の意味で統一国家がここで初まった

飛鳥伝板蓋宮は643（皇極2）年、皇極天皇が小墾田宮から移った所で、大化改新では蘇我入鹿の暗殺事件の舞台になった場所。

現在では、この遺跡の最下層が皇極天皇「後飛鳥岡本宮」、二層目が齊明天皇「板蓋宮」、最上層が天武天皇「飛鳥浄御原宮」という見方が強い。ここからすぐ南西側で発掘調査がつづいていたが、3月9日 そこが天武天皇「飛鳥浄御原宮」の宮廷の一部「正殿」跡と発表された。



「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」
「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

天武天皇と天武天皇の浄御原宮を読んだ歌である。

7世紀後半 壬申の乱（672）を征した天武天皇は浄御原宮で即位する。

律令を整備し、国造を置いて地方各国を直接支配下におき、「天皇」と始めて称し、ここで真の統一国家が成立したと言える。そんな時代を読んだ歌が上記「万葉集」に収められている。

まさに東アジアにあって「日いずる国」の実力と自信にあふれた時代のスタートである。



飛鳥 3代の宮が営まれた王城の地 「伝飛鳥板蓋宮」 <2>

この自信の裏づけに長年 朝鮮半島からの供給に頼ってきた「鉄の自給生産」がある。

古代 大陸から数々の新しい技術が伝来し、多くの渡来人の帰化・交流によりそれらを吸収・消化して必死に自立を目差してきた倭。そして、この時代 鉄をはじめ多くの技術が自立してゆく。

飛鳥京はそんな先端技術の一大生産技術センターであった。

その中心に官営の大生産工房があり、生産と需要を拡大していった。

和鉄・銅・ガラス・漆をはじめ、数々の技術が日本で独自技術として花咲き、次々この飛鳥から地方へ伝播していったに違いない。そして 中央支配の統一国家がほぼではあがり、古事記・日本書記の編纂、永遠の都として藤原京の造営に取り掛かつてゆく。

政治・社会的な「大化の改新」「壬申の乱」などばかりでなく、そんなドラマが今は静かでのんびりとしたこの飛鳥の宮で繰り広げられていった。

飛鳥池生産工房もそんな飛鳥京の大生産工房。どのあたりだろうか・・・

この飛鳥池生産工房遺跡からは「天皇」と書いた木管が出土し、最古の貨幣「富本銭」が鑄造された。

ここから北東 多武峰の山裾の森のあたりか・・・

2.3.2. 水落遺跡・飛鳥寺そして酒船石遺跡 walk

この飛鳥の狭い地で繰り広げられたドラマを思い巡らしながら、左に甘樫丘・飛鳥川 右に多武峰の山を眺めながら、飛鳥川飛鳥池生産工房遺跡を探しての古代史跡を巡る walk。気楽な飛鳥の郷めぐりになりました。

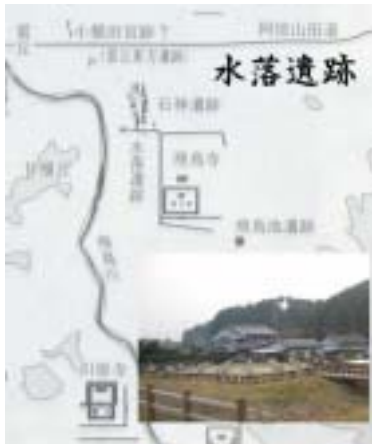
【 北側 山田道から見た飛鳥 】

2005.3.9. ワイド合成のため縮尺変化しています 】



◆ 飛鳥川のほとり水落遺跡（飛鳥の水時計）& 飛鳥寺

日本書紀によれば、斉明6年（660年）5月「皇太子が初め漏刻（水時計）を造り、人々に時刻を知らせた。」とある。水落遺跡が後の天智天皇、中大兄皇子がわが国で初めて造らせた水時計の跡にあたる。飛鳥板蓋宮跡から、田園道を北西へ甘樫丘の方へ10分ほど歩いた飛鳥川の右岸にあり、一片20mの四角い石組み基壇と礎石、黒漆を塗った木箱などが発掘されたという。



日本書紀によれば、斉明6年（660年）5月「皇太子が初め漏刻（水時計）を造り、人々に時刻を知らせた。」とある。水落遺跡が後の天智天皇、中大兄皇子がわが国で初めて造らせた水時計の跡にあたる。

飛鳥板蓋宮跡から、田圃道を北西へ甘樫丘の方へ 10 分ほど歩いた飛鳥川の右岸にあり、一片 20m の四角い石組み基壇と礎石、黒漆を塗った木箱などが発掘されたという。

案内板によると「周囲に貼石を巡らせた基壇を設け、地中に礎石を埋め込みその上に堀立て柱をたてた非常に堅固な二階建ての建物の地下に木樋や銅の管を配置して水時計を動かす水を取り込んでいる。一階には水時計、二階には都中に時を告げる鐘や時刻の補正をするための天文観測の装置が置かれていた」という。

これも飛鳥の時代の新技術。

この水落の遺跡からは右岸に多武峰の山裾まで、広大な田園地かつての飛鳥京が見渡せる。

その田園地の中、集落をバックに蘇我馬子が建てたと言う飛鳥寺がみえる。

もう 何十年前になるか、ぼろぼろに傷んだお堂に飛鳥大仏が座していて、古いが故と感じたことがありましたが、今は立派に修復された飛鳥寺。美しい特徴ある百済仏の御姿で座しておられ、うれしくなる。



飛鳥寺 2005. 2.4. & 3.9.

◆ 酒船遺跡 亀形石造物 飛鳥の大導水施設

飛鳥寺から少し、南へ集落の中の道を引き返しながら山裾の丘陵地に大きな万葉ミュージアムが建っている。その南の丘全体が酒船石遺跡で、その丘の崖下 周囲の丘で囲まれ、谷底となったところに、写真で見覚えのある亀形石造物が発掘保存展示されていた。そしてこの丘の上の竹藪に謎の酒船石がある。



酒船石遺跡の丘周辺 2005.2.4.



酒船石遺跡 亀形石造物 2005.2.4.

この場所は日本書記の斉明天皇 2 年の条に「宮の東の山に石を累ねて垣とす」「石山丘」に符合する遺跡と考えられている。

亀形石造物・小判型石造物はいずれも水を受ける槽で、崖ぎわの砂岩を切り出した湧水施設から小判型石造物→亀形石造物を通して北に伸びる溝に水が導かれる。



この溝の周囲は石敷がひろがり、石垣が階段状に組まれている。これら一連の設備は狭い谷底状の閉鎖された場所であり、何らかの祭祀の場所と考えられている。

そして、何度か改修されながら、7 世紀半ばから平安時代まで約 250 年間続いたという。（酒船石遺跡パンフより）

また、この崖の上には石に溝を切った酒船石があり、この石も含めての一連の導水設備とも考えられるが、その関連は良くわからない。 いずれにせよ、飛鳥時代の導水構造を持つ精巧な石造りの施設で、しかも谷の閉鎖空間をきっちり整備した大土木工事である。飛鳥にはそのような大工事を行う技術と権力がすでにあったという証明でもある。

この遺跡のまわりを再度 一周して、万葉ミュージアムをながめながら、北の飛鳥坐神社へ丘陵地の集落を walk。

まだ、飛鳥池の生産工房遺跡は見つけれず。

こちらの不勉強で集落の人に「鉄の遺跡や炉跡が沢山出たと聞く」と聞いてもまったくわからず。

飛鳥池があるから、それ探せば。。。と思っていたのですが、それも判らず。



ついに また、飛鳥寺の田圃まで帰ってきました。

再度 田圃のおばあちゃんに今度は「飛鳥池教えて・・・」と聞くと「もう そんな池あらへん」と。

「もう 昔に埋め立てられて、今 万葉ミュージアムの建っているその場所が飛鳥池で、そんな鉄の遺跡なんか残っていない。」という。

向こうに見える丘が間違いなく飛鳥池だという。

万葉ミュージアムの案内板は沢山みましたが、飛鳥池や飛鳥池遺跡 ましてや 生産工房遺跡などの標識全くなし。

飛鳥の郷が「万葉集」一色であること思い知りました。



飛鳥坐神社周辺

2.3. 飛鳥 Walk III 7世紀後半 倭王権の大コンビナート飛鳥池生産工房遺跡



酒船石遺跡の北側道路沿いの丘陵地の裏側 丘陵地との谷間に飛鳥池があったという。今はまったく池はなく、飛鳥万葉ミュージアムがこの谷を埋めてつくられて、周辺部の谷間が公園として遊歩道がつけられ整備されている。

外見からはまったく飛鳥池生産工房遺跡の姿は見えない。

建物の敷地の下ちょうど二つの丘陵地の谷間にある遺跡部を埋め戻さず、多数の鍛冶炉がならぶ工房跡が整備され、見学できるようになっている。万葉博物館の本館と展示館の2棟の建物の間の谷間に発掘ままの姿が渡り廊下から見え、その渡り廊下から、遺跡へ出られる。建物に囲まれた狭い場所である。

でも、なんで、こんな重要な遺跡が、建物の下になっているのか。。。

ミュージアムは「万葉集 万葉集 万葉集・・・」遺跡とは完全に別世界である。

出土品は万葉ミュージアムの中にコーナが作られ、一部展示されているが。。。。



建物の下に飛鳥池生産工房遺跡が眠る「万葉ミュージアム」



天武天皇飛鳥浄御原宮・蘇我氏の官営の総合大生産工房跡 発掘時の写真



この遺跡は飛鳥の中核部に営まれた天武・持統天皇の時代 7世紀後半から8世紀初頭にかけての大コンビナート・総合生産工房で、「鉄・銅製品の鑄造・鍛冶工房」「銀・ガラス・めのうなどの宝飾品工房」そして「漆工房」などの一大総合生産工房で宮殿の造営をはじめ、都の生活を物質面から支えた官営工房で、飛鳥浄御原宮や飛鳥の寺院に供給されたとみられている。飛鳥の大和王権がその支配力の根源として有していた大総合コンビナートで、飛鳥の先端技術が此处に結実していたと見られる。

工房群はY字型に伸びる谷の兩岸に計画的に配置され、金・銀・銅・鉄・漆・めのう・水晶・琥珀・鼈甲などを素材に宝飾品・武具・農工具・建築金物や屋瓦などが生産されていたという。

現在建物の間の谷で保存されているのは鑄造・鍛冶遺構が集中する部分。



倭王権の大コンビナート飛鳥池生産工房遺跡 （復元保存万葉ミュージアム）

西側の浅い谷筋の部分で北に下る斜面を何段にもわたって削り出し、整地をおこなって、ほぼ平坦に近い作業面を造成し、そこにたくさんの炉がつくられている。炉跡は、基本的に地面を浅く掘りくぼめた形態で同じ場所で、何度も作り替えをおこなったものもある。何よりも飛鳥池遺跡を有名にしたのは、7 世紀後半に鑄造された「最古の貨幣」富本銭の発見で、生産工房遺跡の展示コーナーに中心展示されている。

「日本書紀」には、天武 12 年 4 月、「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」と詔（みことり）が出されたことを伝える。

また、「天皇」と記された木簡もこの場所から出土。

天皇の呼び名が確認できる最古の木簡である。



日本最古の貨幣「富本銭」

飛鳥池生産工房遺跡出土

「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」

「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

7 世紀後半 天武天皇の時代 律令を整備し、国造を置いて地方各国を直接支配下におき、「天皇」と始めて称し、真の統一国家が成立する。

東アジアにあって「日いずる国」の実力と自信にあふれた時代のスタートである。

そんな時代を支える飛鳥王権の一大コンビナート・生産工房が飛鳥池生産工房遺跡である。

もちろん その中心は「鉄・銅製品の鑄造・鍛冶工房」 「銀・ガラス・めのうなどの宝飾品工房」そして「漆工房」など先端技術を駆使した工房で生まれる数々の新しい製品。それら 技術と製品が次々と日本各地へ伝播していった。



富本銭



ガラス・玉類



金・銀製品



鉄製品



銅製品

飛鳥池生産工房で製作された製品

古代の産業革命ともいえる新技術革新によって、生産活動が拡大する。そんなシステムを担った大コンビナートである。

「壬申の乱」（672 年）に勝利した天武天皇（在位 672－686 年）が強大な力を手にいれ、唐の都を模した永遠の都 藤原京の造営に着手することなど合わせ、天武天皇の時代 国力を充実しようとしていた様子を物語る重要な遺跡であろう。

こんな生産活動の大変革を示す古代の生産工房について、なぜ系統的にきっちりまとめ評価がなされないのだろうか。。。。

万葉ミュージアム 飛鳥池遺跡からの出土品展示はあるものの万葉集一色の文化テーマの博物館。この場所は飛鳥文化を支えた生産活動その現場そのものであるのにまったくの視点外。 その方が人は集まるでしょうが、そんなムード評価したって仕方がないと思うのですが。。。

あまりの落差の大きさ感じたのですが、私の思い入れの差でしょうか。。。。。

産業考古学が叫ばれている昨今 近代の産業遺産ばかりでなく、古代についてもそんな目が必要になっていくのではないのでしょうか。。。。。

夕ぐれの中の万葉ミュージアムを見ながら、そんなこと考えながら、飛鳥の郷を後にしました。



2005.2.4. Mutsu Nakanishi



7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk
官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」

3. 飛鳥浄御原宮 「正殿」遺跡 発掘現場を訪ねて 2005.3.9.



飛鳥浄御原宮「正殿」跡遺跡 発掘現場 2005.3.9.

3.9. 朝日新聞の朝刊が大きく後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮「正殿」跡全体が発掘されたと檀原考古学研究
所が発表したと伝えた。正殿とは天皇が在所していた私的空間 つまり天武天皇の皇居である。

場所は伝飛鳥板蓋宮跡の南約 100m ちょうど明日香町役場との中間の位置である。

東西 23.5m 南北 12.4m 高床式の飛鳥時代最大の建物で正殿正面中央には入り口がなく、大きさや形の異なる
建物が東西に隣接するなど、左右非対称の特異な構造で、四隅には旗ざおを立てたとみられる跡があり、「莊
厳さを演出した」と考えられている。

また、渡り廊下でつながった別棟、池を望む縁側がついた建物も出土し、周囲やくぼみの形状から池のある
庭園が近くにあり、縁側から眺められたらしい。

伝飛鳥板蓋宮跡に立って「ここが天武天皇の飛鳥浄御原宮」と知ってもピンと来ていなかった時だけに「飛
鳥京 天武天皇の皇居全体が発掘された」の報にビックリ。

ちょうど大和葛城山麓の「忍海」に出かけることにしていたので、3月9日の午後飛鳥まで足をのばして、
後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮「正殿」跡発掘の現場を見てきました。



後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮「正殿」跡発掘現場 2005.3.9.

発掘現場では、まだ、調査が続けられており、また、現場の周囲には現地説明会用の足場の組み立て作業があわただしく行われていた。

本当に発掘現場にフレッシュの言葉はそぐわないが、正殿跡の柱の周りに置かれた石敷きと柱穴がくっきりとみえ、本当に美しい。

四隅に旗が立てられたという穴 そして 正殿の左右の非対称の建物跡そして南西端にあったという池の跡も良くわかる。(もっとも 新聞片手の解説との照合ですが・・・)



南東隅から正殿跡発掘現場全景を眺める

手前に旗ざおの穴と別棟への渡り廊下の柱穴の周りの石敷

奥に正殿の柱穴の周りの石敷が一行に等間隔で並んでいる。



北西隅より発掘現場西側

手前に旗ざおの穴周りの石敷奥に縁側の土台 右奥が池 右手前に細長い建物の柱穴が続いている



発掘現場の北側

田圃の向こうに伝飛鳥板蓋宮跡がみえる。此処には天武天皇の飛鳥浄御原宮など3代の飛鳥の宮があつた。

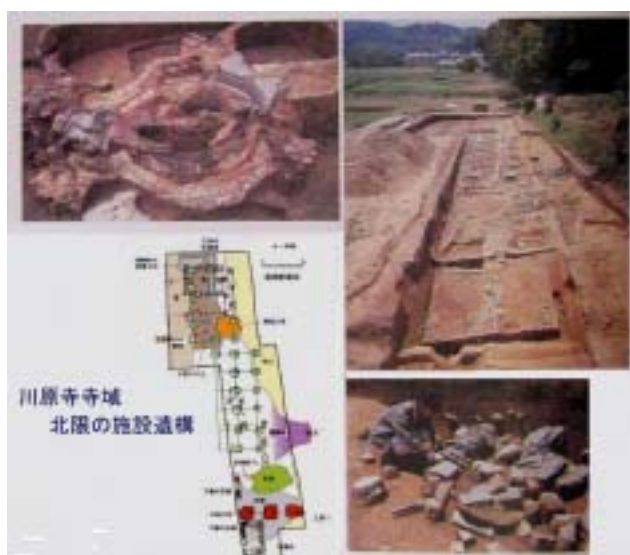
7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥Walk

4. 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥Walk まとめ

官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」



川原寺寺院生産工房遺跡 発掘現場



天武天皇 官営飛鳥池生産工房遺跡 発掘現場



7世紀後半 倭王権の王城の地 飛鳥京にあつた王権の大コンビナート・生産工房
「川原寺寺院工房遺跡」&「飛鳥池生産工房遺跡」

倭王権が成立し、三輪山麓に宮があった時代から飛鳥の地に宮が移ってきた 7 世紀「飛鳥時代」

それをまとめると

「大化の改新 壬申の乱を経て 倭王権が国家として日本を統一支配を達成する時代」

「大陸・朝鮮半島の文化・技術を吸収消化して、日本の文化・技術として自立を達成する時代」

「鉄の 6 世紀」といわれた 5,6 世紀にかけて、朝鮮半島との交流の中 鉄の供給を中心とした朝鮮半島からの先進技術・文化の覇権を握り、その技術展開力を支配力のエネルギーとして日本の統一を進めてきた大和王権。 7 世紀 飛鳥の時代には悲願であった日本国内での鉄の自立生産・たたら製鉄による大量生産を達成して、朝鮮半島依存から抜け出した。

政治的には豪族連合から脱し、大化の改新・壬申の乱を経て、律令制度のもと日本諸国に国造を置き倭の直接支配を確立した時代、日本自立の自信を高めた時代が 7 世紀飛鳥の時代である。

そんな数々のドラマが繰り広げられた飛鳥に倭王権直轄の鍛冶工房があると聞いて出かけましたが、鍛冶工房というより、国の自立をかけた一大先端技術センターでありました。

鉄・銅・金・銀などの金属生産工房 ガラス・玉の工房 漆工房 それらが総合的にひとつの生産工房として機能していました。まさしく当時の先端技術のナショナルセンターであったのでしょう。

もっとも鉄素材の生産は此処では行われず、大和・河内・近江や日本諸国から集めて持ち込まれていたと考えられる。 また、王権の鉄鍛冶工房としての役割は飛鳥周辺大和の大県・布留・忍海などの大専業鍛冶工房に譲るのかも知れない。

この鉄に見られるように先端技術の大生産基地は他にあったとしても 王城の地に先端技術の総合センターがあつたこと このことが、まさしく王権が先端技術の覇権を一手に支配し、日本全国へ支配力を強めていった象徴だろう。

そんな飛鳥の絶頂期が壬申の乱を征して即位した天武天皇飛鳥浄御原宮の時代。

天皇をはじめて名乗り、

「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」

「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

絶対君主誕生の歌が読まれる。

すごい時代であった。日本古代の産業革命・高度成長の時代であったろう。

そんな時代の象徴が飛鳥池生産工房遺跡であり、そこで鑄造された富本銭。

そんな中から 記紀の編纂がスタートし、風土記編纂へとつながって行く。

そして、永遠の都「藤原京」造営を経て、豪華絢爛たる平城宮奈良時代へとつながって行く。

飛鳥という我々にとっては「万葉集」 生産活動とはほど遠いロマンチック・ノスタルジックな落ち着いたイメージの世界であるが、エネルギーな躍動感あふれる時代でなかったか。。。。。

万葉集もそんな時代背景を持って眺めるのも必要ではないか。。。。。

久しぶりに飛鳥を一日かけて Walk。

昔の本当に道の狭い郷からよく整備された郷に変わっていましたが、車の入らない広い飛鳥京の空間がそっくりそのまま残っていて、一日 walk を楽しめました。

甘樫丘からみる飛鳥の郷の狭い空間と大和平野の広さのコントラストにもビックリしました。

でも 一番の収穫は飛鳥池生産工房遺跡に象徴される飛鳥の時代感。

「シルクロード 奈良」の時代に先立って、飛鳥の時代には古代の産業革命・高度成長の時代があり、それを成し遂げた大陸・朝鮮半島からの道が飛鳥へとつづいていた。

時代を超えた産業・文化の道それが「和鉄の道」と感じています。

ずっと追ってきた和鉄生産自立の時期 朝鮮半島と日本の鉄を通じた交流史

そんなものが、飛鳥で一区切りする。

まだ 謎が解けたわけではありませんが、飛鳥の中にそれらの答えがあるような気がしています。



2005.3.15. Mutsu Nakanishi

7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk
官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」

1. 「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」概要
2. 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk
3. 飛鳥浄御原宮 「正殿」遺跡 発掘現場を訪ねて 2005.3.9.
4. 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk まとめ

【完】



甘樫丘より 大和平野 2005.2.4.



山田道より 飛鳥京 全景 2005.3.9.

